

収録・解説 酒井董美

語り手 小椋喜代さん  
(明治30年生まれ)  
昭和54年9月23日収録

あらすじ  
お婆さんが外から帰ると、お嫁さんが出てしまっ  
し、お婆さんが帰られ  
たら、お婆さんが出てし  
まう。少しも一緒にいな  
いように仲が悪かったっ  
て。

ある家のお婆さんと  
お嫁さんは仲が悪く、お  
婆さんが外から帰ると、  
お婆さんが出てしまっ  
し、お婆さんが帰られ  
たら、お婆さんが出てし  
まう。少しも一緒にいな  
いように仲が悪かったっ  
て。

## 薬を殺す姑

(東伯郡三朝町木地山)



イラスト・福本隆男

## 医者のお婆さんが「薬」で仲良しに

罪ができるけえ、ええあ  
んばいにして死ぬるやあ  
にしたるけえ」と言った  
そうな。そうして毒を盛  
った薬をくれたそうな。  
「二らあ一週間ほど飲  
た罰が当たっちゃあいけ  
あん」というところで、お  
嫁さんはお婆あさんに魚  
を買ってきて食べさせた  
り、親切な言葉をかけた  
た。  
お婆さんはそれからそ  
の毒を持って戻って、「一  
うな。そうしていたら、お  
婆あさんが「まあ、なして  
うちの嫁はええようにな  
ったでああか。だれが言  
っていで飲んであはるけ  
れば、元気にならはるけ  
え。仲良しに暮らさにか  
いけんけえ」と言っ  
た。  
それから、お婆あさん  
はお婆さんによくしなさ  
るし、お婆さんがお婆あ  
さんを大事にすればする  
ほど、お婆あさんもよい  
お婆あさんになっていか  
れたそうな。  
お婆あさんは、「二があ  
ど、医者が間に入って、  
いいお婆あさんなら殺  
されんわあ」という気  
になってしまったそうな。  
それからまた、お婆あ  
さんが医者のところへ行  
って「お婆あさんがなんと  
ええお婆あさんになりな  
はって、近ごろわれによ  
うにしてごしなはるし、  
愛おして殺されぬけえ、  
何とかして毒の消える薬

### 解説

関敬吾『日本昔話大成』  
の話型で笑話「愚か嫁」  
にある「姑の毒殺」に  
該当する。各地でもよ  
うに話されている話である。  
(元鳥取短期大学教授)  
(水曜日に掲載)